

「人類モ亦生物ノ一ナリ」

渡辺利夫 (拓殖大学学事顧問)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十二月より現職。

後藤新平という官僚政治家がいる。後藤の政治的業績について記述する文献は数あれども、「後藤思想」が語られることはない。政治家の思想であれば、それが現実とどういふ関わりをもっていたかという観点が重要にならう。この観点からして後藤は高く評価されるべき存在だと私は考えるのだが、そういう見立てで後藤を論じる研究者がいない。後藤の台湾統治とは、思想と現実の見事な一致であった。

後藤思想の出発点であり到達点ともなったフレーズが、「人類モ亦生物ノ一ナリ」である。人間とは「生理的動機」に発し「生理的円満」を求め、生命体としての生をまっとうするために生きる、そういう存在だ。人間も他の生物や動物と変わるところはない。ならば、台湾住民が生理的円満を得んとどのような環境の中で生きているのか。このことを徹底的に調査・研究したうえでなければ、台湾統治のための政策の立案や施行などできない。

後藤が説いて止むことのなかった「生物学の原

理」とは、一社会をなりたたせている法や制度や組織や慣行に適合的な政治原理のことである。総督府民政長官として台湾の民政を担わされた後藤は、一代の軍政家・児玉源太郎を総督に仰ぎ、その権威と権力のもとで存分に働いた。

児玉は総督就任に際して「施政方針演説の草稿を認めよ」と後藤に命じた。後藤は足下に「施政の方針表明などもっと後でいい、総督がまずやるべきこととは、総督がその統治を委ねられた台湾の住民社会のありよう、そのグラスルーツに古くから伝わる慣行つまりは「旧慣」を調査することでなければなりません」と応じた。そうして「総督、生物学の原理にもとづく統治を開始することにしませう」と諄々と説いた。児玉も道理を深く理解し、「子メ一定ノ政策ヲ宣スルヲ得ズ」と表明した。公的文献にそうある。

政治思想とは、現実とどう向き合おうかという観点から評価されるべきものである。閉塞の色濃い日本の現実を、思想をもって切り開く政治家、出でよ。